

川崎医科大学附属図書館の‘激動の四十年’と‘未来への展望’

佐々木 和信, 岸 友子, 黒木 和子

川崎医科大学附属図書館, 〒701-0192 倉敷市松島577

1. はじめに

附属図書館は医科大学とともにこのたび40周年を迎え、内部の改装を2010年に終了しました。図書館設立時の状況は、「川崎学園創立10周年誌」¹⁾および川崎学園だより^{2, 3)}に詳細に記録され、この度の改装は学園だより(第372号)⁴⁾に紹介されています。本稿では利用者への支援サービスという視点にたつて、図書館の40年の歴史を振り返ってみたいと思います。図書館の設立当時から現在まで、書籍や雑誌など印刷物を取り巻く環境は情報技術の進歩によって大きな影響を受け、特に医学関連は‘激動’という表現がおかしくないほどにめまぐるしく変わりました。はじめに、‘激動’の例をいくつかご紹介しましょう。

データベースはその一つです。現在最も良く使われている「PubMed」を例に、医学関連のデータベースの発展の概略を紹介します(図解 PubMedの使い方⁵⁾)。「PubMed」の原点は、アメリカ国立医学図書館が1879年に創刊したIndex Medicusで、一番歴史のあるデータベースです。二度の世界大戦をへて変遷を重ねながらも、貴重な二次資料として現在まで継続されてきました。1970年代にそれをベースに医学文献分析・検索システム(MEDLARS)が開発され、オンラインサービスMEDLINE(MEDlars onLINE)が、日本でも1976年から現在の科学技術振興機構をとおして始まりました。それは本学設立の6年目でした。1980年代

にMEDLINEのCD-ROM版が発売され、1997年にはアメリカ国立医学図書館は、MEDLINEをインターネットで「PubMed」として無料サービスを始め、一気に利用が拡大しました。その後現在までの14年間、「PubMed」を旗手として特色あるデータベースが次々と生まれ、学園でも活発に利用されています。

電子図書(eブック)および電子ジャーナルなどの電子出版物も、コンピュータとインターネットの普及により大きく変貌しました。加えてiPadに代表されるタブレット端末の普及で、日本を含め世界中の歴史的に価値をもつ膨大な書籍を電子図書として、個人が時代を超えて容易に閲覧できるようになったのは、この2, 3年の事です。

利用者の附属図書館への要求も大きく変わりました。そして、その変化に否応無しに対応していかなければ、図書館の存続が危ぶまれる時代に突入したことを、スタッフはヒシヒシと感じています。附属図書館が良質の支援を続けていくためには、その原点に立ち戻り、図書館本来の目的を見据えつつ、現在から未来を展望する事が必要です。

「人びとが未来へ向かって進むとき、これまで歩んできた道について情報を提供すること、それが図書館の目的です。図書館は今日生きている人びとを、過去や未来の人びととつないでくれます。思想やアイディ

アが生まれ、自由に羽ばたくところなのです。」(本と図書館の歴史⁶⁾)

附属図書館の現状を理解していただくため、本稿はこれらの課題の中から、医学雑誌購読、データベースの利用そして電子図書についてご説明し、現状と課題を整理した後で附属図書館の未来への展望について触れたいと思います。

2. 医学雑誌の現状と課題

附属図書館の年間予算のほとんどは、研究用の医学雑誌の購読に充てられています。なかでも外国雑誌の比率が際立って高いので、外国雑誌を巡る課題から始めましょう。

さかのぼって15年前の医学図書館を考えてみると、日本中どこの医学図書館であっても、医学雑誌に対する姿勢は規模の差こそあれ似通ったパターンでした。すなわち、新着雑誌のプリント版を到着順に見やすい様に表紙を上、雑誌書架に並べ、それらのバックナンバーを発行年ごとに製本し、書庫に整然と保管するというスタイルです。一流雑誌の貴重なバックナンバーをどれだけさかのぼって所蔵しているかが、図

書館の「格」を表した時代でもありました。しかし、オンライン版(電子ジャーナル)の登場によって、状況は一変しました。附属図書館で閲覧できる外国雑誌数を、プリント版とオンライン版に区別し、1977年から2011年までの34年間の推移を図1のグラフで検証しましょう。2003年以前とそれ以後の10年で、購読雑誌数において大変な違いのある事が一目瞭然です。2003年は本格的にオンライン版の購入を始めた年にあたります(図1)。

開学から2002年まで

本学の購読タイトル数は1987年の720タイトルがピークで、設立当初より1995年まで600タイトルをほぼキープしていました。しかし、1995年以降タイトル数は年ごとに減少し、1999年には500タイトルを切り、2002年で388タイトルとなりました。1987年からの15年間で、年間購読雑誌が332タイトル(約46%)減った事は、毎年約20タイトルずつを継続して削減したことになります。これは本学附属図書館のみならず全国の大学図書館で共通の現象でした。外国雑誌の購入価格が高騰し、価格が年々着実に上昇

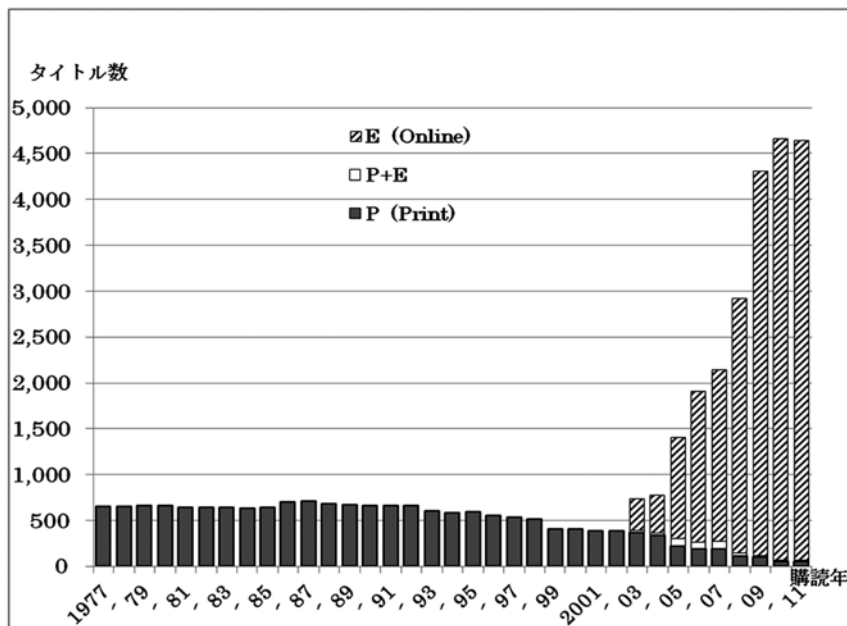


図1 本学購読外国雑誌数の変化 1977年～2011年

するにもかかわらず、図書館の雑誌購入予算が追いつかず、購入タイトル数が全国的に急減しました。大学図書館の存立を脅かしかねない現象であった事から、後に「シリアルズ・クライシス Serials Crisis」として認識されています（シリアルズ・クライシスと学術情報流通の現在(3)⁷⁾）。全国の大学図書館はこれに対応するため、コンソーシアム（雑誌購入を目的とする連合）を結成しました。そして電子ジャーナル導入への道を進むこととなります。本学はコンソーシアムを通して2003年から、外国雑誌の購入を始めました。

2003年から現在まで

「シリアルズ・クライシス」の間、国際的な大手の商業学術出版社の吸収合併が相次ぎました。売上ベースによる市場占有度は、上位の大手5社でほぼ60%となり、結果として学術雑誌国際市場は寡占状態の様相を呈するようになったといわれています（シリアルズ・クライシスと学術情報流通の現在(3)⁷⁾）。大手5社とは、2002年当時で Elsevier, Springer, Wiley, Blackwell および Academic Press をさします（現在、Blackwell は Wiley に、Academic Press は Elsevier に吸収されました）。このような背景下で、本学は2001年の「Nature」誌を皮切りに、オンライン版の導入を2003年から本格的に始めました。グラフから、導入当初は一つのタイトルでオンライン版とプリント版の両方を購入し、切り替えを慎重に見極めていた様子が見えがええます。オンライン化へのアクセラを強く踏み込んだのは2008年で、その年プリント版の購読タイトル数は前年比約50%減になりました。そして現在までオンライン版の購読数は驚異的に増加する一方、プリント版は2011年で49タイトルまでに減少しています。現在プリント版の総タイトル数は、本学の外国雑誌アクセス可能タイトルのわずか約1%で、需要はあるがオンライン版が販売されていないか、オンライン版の価格が非常に高いケースに限定されています。

オンライン版は初め、プリント版の「おまけ」として、無償で出版社から提供され、その後価格をプリント版より低く設定して販売されるようになりました。出版社はコンソーシアムとの価格交渉に対して、複数のオンライン雑誌をパッケージにして販売する戦略をとってきました。附属図書館を含め日本の図書館は、外国雑誌購入費用を現状維持におさえる努力を続けながら、必要な雑誌を含むパッケージをコンソーシアムをとおして購入するよう、購入方法を変更させていったのです。その結果、2011年度に本学で閲覧できる外国雑誌タイトル数は4,638で、1987年の約7倍増となりました。

オンライン版の増加は、利用頻度が低くかつ価格の高いプリント版を中止し、それをオンライン版パッケージ購入に切り替えていった結果です。プリント版のみが主たる資料であった長い時代を経験してきた図書館スタッフにとって、これは価値観の大変な転換でした。オンライン版の増加によって、顔なじみの先生たちが図書館へ足を運ぶ必要がなくなってきた事に一抹の寂しさを感じながら、図書館が利用者これまでになかった情報環境を提供できるようになった事を心から歓迎した時期です。プリント版・オンライン版それぞれでバックナンバーの保管の将来についての展望が見えないなど、種々の不安要因を抱える様になった時期でもあります。しかし好むと好まざるとに関わらず、方針転換が附属図書館の利用者にとっては、プラスの方向に強く作用した事は、館外文献依頼数の経年変化から見て明らかです（図2）。

本学図書館で入手できない文献は、他大学図書館へ複写を依頼します。図2は1977年からの複写依頼件数を示します。プリント版雑誌のタイトル数の減少とともに、1990年代後半から2000年代初頭にかけて依頼請求が増加し、オンライン版導入にともない2004年以降明らかに減少に転じています。複写依頼数には和雑誌も含まれますので、依頼数の減少がオンライン版導

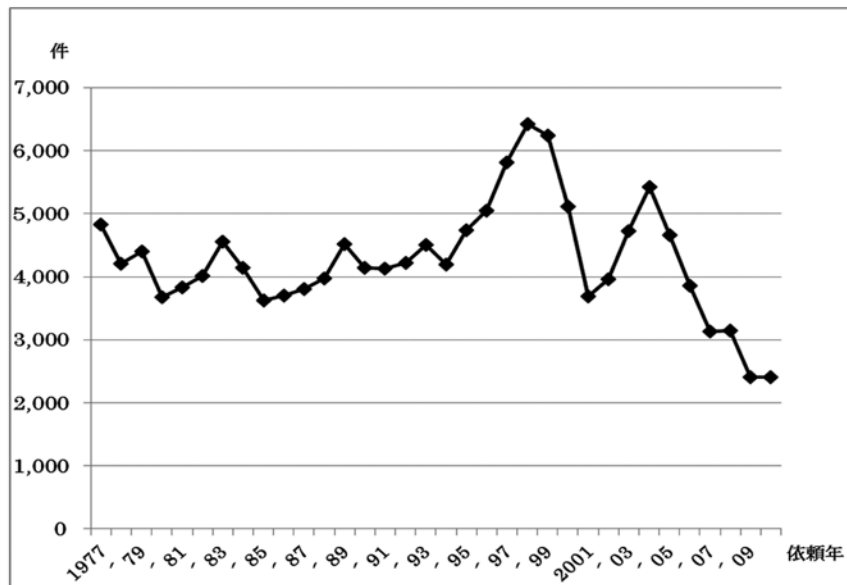


図2 館外文献複写依頼数の経緯 1977年～2010年

入の増加を100%反映している訳ではありませんが、オンライン化が大きく関わっていると思われます。

さて、この状況は今後も安定して継続するのでしょうか？ 残念ながら、図書館関係者の多くは否定的です。なぜなら、これは驚異的な円高、出版社側のオンライン版普及戦略があり、対してコンソーシアムという連合体が非常に有効に機能してきた結果であり、ある意味大変な幸運！と皆が考えているからです。そのいずれもが、いつかは変化するだろう、もしくは、一気に環境が激変してもおかしくない危険を含んでいるからです。図書館が将来も引き続き利用者の要望に応じていくには、雑誌に加え、電子図書（eブック）の導入も視野に入れる必要があります。オンライン版にはプリント版には無いたくさんのメリットがあると同時に、少なからぬデメリットもあります。これについては、電子図書の項であわせて考えてみたいと思います。なお、2012年に本学で購読・アクセス可能外国雑誌タイトル数は4,909タイトルになる予定です。

つづいて国内雑誌の状況を見ましょう。図3は国内雑誌購読タイトル数の経緯を示します。1993年までは300タイトル以上で、購読雑誌の比率は外国雑誌2：国内雑誌1をキープしていました。94年から99年まで約70タイトルが削減されました。これはひとえに外国雑誌価格の高騰のあおりを受けた結果で、利用頻度の低い雑誌は関係の教室で購入する様をお願いした時期です。外国雑誌の購読タイトルは以後も減りますが、国内雑誌は99年以降、約230タイトルをキープしています。リミットまで削減された状態にあると思われます。外国雑誌にくらべると、国内雑誌のオンライン版発行はスローペースです。なお、国内の異なる出版社からの雑誌をまとめた日本版データベース「メディカルオンライン」が2012年から正式導入されます。それによって、購読・アクセス可能国内雑誌は来年度より約1,000タイトルとなります（図3）。

3. 附属図書館の医学データベース

現在、図書館ホームページをゲートとして、医科大学で利用できるのは9つの医学データベースで、英語データベースが6、日本語データベースが3です（図4）。

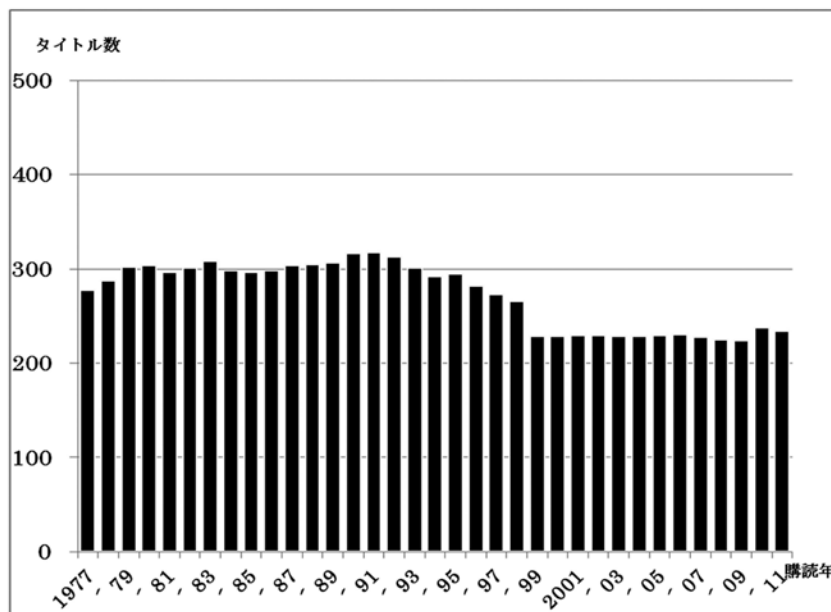


図3 本学購読国内雑誌数の変化 1977年～2011年



図4 図書館ホームページ

そのなかで、無料のPubMedを除き、利用者が直接にアクセスする有料のデータベース(DB)について、導入した年代順にその特徴と利用状況を紹介します。

(1) 医中誌 Web (提供元: 医学中央雑誌刊行会)
1996年にCD-ROM版, 2001年よりWeb版

を導入。1903年創刊での国内随一の網羅性を誇る「医学中央雑誌」の文献で、日本版PubMedといえるでしょう。医学関連分野(医学, 歯学, 薬学, 看護学, 獣医学)の国内誌約2,400タイトルを収載。医科大学・医療福祉大学・医療短期大学など学園全体で、約100ログイン/日。

(2) JCR (Journal Citation Reports, 提供元: トムソンロイター社)

最も早く導入した外国版DBで、1999年にCD-ROM版の購入からスタートし、2005年からWeb版に切り替えました。インパクトファクターなど引用データに基づく雑誌の評価ツールです。「シリアルズ・クライシス」の時期、雑誌削減のための資料のひとつとして活用され、現在約1,500件/年のログインがあります。

(3) Cochrane Library (提供元: Wiley社)

2005年に導入。1992年イギリス国民保健サービスNHS(National Health Service)で発足した医療評価プロジェクトで、治療や予防のエビデンスとなる情報を探す際の効率的なDB。RCT(ランダム化比較試験,

Randomized Controlled Trial) の文献と総説から構成されています。提唱者「アーチボルト・コクラン」の名が付いています。ワンタイム・1アクセスの契約で約100件/年のログインがあります。

- (4)今日の診療 Web Premium (提供元:医学書院)
2006年導入。医学書院発行の冊子体「今日の治療指針」「今日の診断指針」等計13書籍を電子版として提供している DB。ログイン数は2,855件/年。
- (5)Web of Science(提供元:トムソンロイター社)
2008年に導入。学術文献 DB として引用文献検索機能を備えています。800件/年のログインがあります。
- (6)UpToDate (提供元: UpToDate 社)
2011年秋から試用をはじめ、2012年1月より正式運用の DB。複数の臨床教室より、2年前から強い導入希望が図書館によせられ、導入に向けての準備が進められてきました。臨床支援ツールとして、エビデンスに基づいた最新で公平な臨床サポート情報を提供しています。現在、平均260件/月のログインがあります。
- (7)メディカルオンライン (提供元:(株)メテオ)
国内雑誌の全文 DB で、オンライン版国内雑誌880タイトルを収載する。正式運用を2012年1月より開始します。

図書館ではこれらの DB の中で、特に中核となる「PubMed」と「医中誌 Web」については、ミニ講習会をそれぞれ教職員学生を対象に月1回のペースで開催しています。また、外部からの講師による講習会も随時開催しております。DB 導入に関しては、これまでも図書館にいろいろの要望が寄せられていますし、特に最近では UpToDate のような「臨床診療ツール」に強い要望があります。いろいろの特徴を持つ DB の開発が進む中で、限られた図書館予算内の DB の選択が今後の大きな課題になります。DB は価格面で、雑誌と比較してその数倍の規模ですから、新規の導入にあたっては詳細な調査が必

要になります。今回の「UpToDate」の導入に当たっては、利用頻度の低いハンドブック等の継続購入図書および雑誌類等の削減で対応しました。この1月から導入される「メディカルオンライン」は図書館予算の枠外で、医科大学・附属病院のいろいろの部局のサポートを得て導入が実現しました。

4. 蔵書検索システムおよび電子図書(eブック)の現状と課題

図書館の業務は様々なメディアの中から、利用者に適切なものを図書館資料として選択収集し、利用者が容易にアクセスできるようツールを作り提供する事です。既に述べた様に、附属図書館の最大の資料は外国医学雑誌です。医学雑誌に次ぐ第二の資料は書籍で、この中に医学書と一般教養書が含まれます。これらの蔵書に利用者がアクセスする方法は従来「目録カード」が長年、使われてきました。ケースにぎっしりとつまったカードをめくり、希望の書籍を探すのが長年にわたって図書館で蔵書検索する主たる方法でした。図書館の管理・運営にコンピュータを活用する為、附属図書館では1999年に図書館業務システム(リメディアオ・リコー社)を導入し、2001年から蔵書検索システム OPAC (Online Public Access Catalogue) を公開しました。それ以後、利用者がカード目録を使う事はなくなり、図書館のシンボルであった目録カードとカードケースは、図書館の改装時に過去の遺物として撤去されました。アクセスツールとしての目録カードの廃止とケースの撤去は、この40年の間のとても大きな変化の一つでした。

医療福祉大学附属図書館および医療短期大学附属図書館も医科大学と同時に OPAC が導入され、学園内の他施設の図書館蔵書が、一括してネットワークで検索できるようになりました。附属川崎病院図書室にも2011年10月末に業務端末が設置され、OPAC は今後もキーツールとして学園内の図書館を結びつけていくと思います。OPAC は学園の外部からも利用する事がで

きます。

2011年現在, 附属図書館の蔵書数は一般教育書および医学書あわせて, プリント版45,500冊と電子図書4,600冊です。一般にeブックと呼称される電子書籍は, 従来からプリント版図書のように書架で閲覧されてはいたませんが, 図書館資料として近年急速に増えている図書形態です⁸⁾。附属図書館でのeブックは現在タイトル数でプリント版の約10%を占め, そのすべてが医学・自然科学系です。2009年に3,066冊, 2010年に1,535冊を Springer 社より一括購入しました。項目2で説明した様に, 国際的な学術出版社は雑誌の電子化には足並みをそろえ積極的に攻勢をかけてきました。テーマ毎にまとめて発行する単行本(いわゆるモノグラフ)の電子化は, 2007年頃から Elsevier 社や Springer 社などが販売を始めました。しかし出版社により販売方法はさまざまでさらに価格も高く, 図書館側もeブックが果たして利用者に受け入れられるかどうか判断に迷っていたところがあります。そのような状況のなか, Springer 社が利用機関のサイズごとに別価格を設定し, eブックを発行年度・分野毎に切り分けたパッケージ販売を始めました。Springer 社にとってもeブックの将来性を知るための実験企画と思われます。附属図書館はeブックに対する利用者の反応を知るために, 2か年にわたり合計4,600冊のeブックを購入(一括買い切り)しました。

本学でのeブックのこれまでのアクセス数を調べると, 導入後の2年間で350-400/月という結果でした。これは図書館サイドの予想を大きく上回る数字でした。キーワードによる検索は雑誌オンライン版とeブックとがシームレスに連携されているので, 利用者は単行本と雑誌を区別する事無く, 原著論文・総説を活用している結果と思われます。これはeブックが本学で広く受け入れられていることの証左であり, 学術書オンライン化は今後急速にすすむ可能性を示していると思います。医学をふくめた

学術情報に関していえば, オンライン版はプリント版に比べ圧倒的に優位であることが本学の結果からも判断できます。

電子ジャーナル・eブックは, 図書館と利用者に大きなメリットをもたらすといわれています。図書館の開館時間に関係なく1日24時間, 週7日利用できる事。一つの資料に何人でも同時にアクセスできる事に加え, 図書館にとっては保管スペースが不要になる事, 蔵書の維持・管理業務が効率化する事など, たくさんの利点あげられます。

ここで今から40年前に公開された一本のSF映画⁹⁾を紹介しましょう。タイトルは「アンドロメダ」。人工衛星が落下したアメリカ・ニューメキシコの村の住民が次々と死亡するという事件がストーリーの発端です。地球外微生物による感染がうたがわれ, 病原体と治療方法を探るため, アメリカの一級の科学者が極秘にある研究施設に集められました。彼らが解析を始めようとした時, 一人が所長にした質問「図書館はこの施設のどこにある?」 答え「図書館は無い。情報はすべてコンピュータに入っている」。この映画のように, 図書館資料は将来すべてが電子化され, 図書館はなくなってしまうのでしょうか?

電子出版物は電気, コンピュータ, インターネットの存在を絶対前提とする実体の無い「バーチャル出版物」です。バーチャルであるが故に, 出版社のサーバや情報をうけるコンピュータのブラウザとの相性の問題, バックナンバー閲覧の継続性など, プリント出版物にはない不確定要素をたくさん内包しています。もしバーチャルを支えている何処かに障害がおきたら, すべては消えてなくなります。極端な場合, たとえば大きな災害がおきたら, たとえば戦争が勃発して国際交流が断絶したら, 本学図書館を通して利用者が閲覧できる外国雑誌の99%は消失します。書籍はプリント版であれば

個人が一生持ち続ける事も出来ますが、はたしてオンライン版ではどうでしょうか？ 組織を離れて個人が最新のコンピュータ、最新のブラウザのアップデートをいつまでも続けられるでしょうか？ これまでもソフトウェア等企業側の都合によって、個人の大切なデータが切り捨てられてきた事は無かったですでしょうか？ さらにいえば、実体の無い電子図書に古本は存在しません。東京神田の古本屋でオンライン電子図書が販売されることはないでしょう。

国際的にオンライン化がすすむ医学書籍の中で、これまで版を重ねて来た教科書について、国際大手出版社の対応は雑誌・単行本と少し異っているようです。教科書の付録としてCD版をつけて販売したり、オンラインでの閲覧ができるようにアクセス用パスワードをつけたりとあの手この手を模索しています。McGraw-Hill社ではACCESS Medicineとして、ハリソン内科学書など定番テキスト14タイトルのeブックをパッケージ販売しています。Online Computer Library Center, Inc. が提供する「基本医学書電子書籍129タイトル」の中には「ギャノン生理学」や「グッドマン&ギルマン薬理学の基礎」、「ハリソン内科学」など多数の有名なテキストが電子化されています。しかしこれらはプリント版にくらべ一般的に高額であり、さらに同時アクセス数の多寡で図書館の購入価格は異なる事、また買い切りではなく年契約スタイルという事もあって、雑誌に比べると図書館導入へのハードルは高いのが現状です。これは教科書に対する考え方が、日本と欧米で違うという見方もあるように思われます。日本では教科書は自分で購入する物であり、かたや欧米では図書館で利用するものという考え方の違いです。教科書選択の幅をひろげるために、偏る事なくできるだけ多くの種類の教科書を購入・閲覧しているのが、日本の図書館の考え方と思います。利用者がページをめくりながら知識を確かめ、行ったり来たりを繰り返して知識を重層させる教科書は、実体のある書籍として存在

する事が必要な様に思うのは、我々日本人特有の考え方でしょうか？ 改訂のペースの早い国際的な教科書は、雑誌・単行本と同じレベルで欧米ではとらえられているようで、定番教科書の電子化の行方はさらに見極める必要があります。

iPadなどのタブレット端末の発達により、一般書でも電子版が発行されるようになり、部数を重ねていることが報道されています。現状でタブレット端末が得意とするのは、新聞、週刊誌、コミック本、小説など、ショートライフの読み捨て分野で気を吐いているように思います。ただ一方で、現実の図書館では片隅の書架にひっそりとおかれ、ページの変色とともに貸し出しされることもなく忘れ去られてしまった一昔前の名作群が、「青空文庫」としてバーチャルに生き返りつつあるのは画期的な事です。著作権50年という時間のフィルターにかけられた一万冊を超えるタイトルを、iPadで電車に気楽に持ち込み無料で鑑賞できる時代になったのですから、70歳をこえる読書愛好家が果敢にiPadを使いこなしている事を知るにつけ¹⁰⁾、タブレット端末が書籍を活用する新しいツールとしての地位を獲得した事は確実で、このツールに図書館がどう対応していくかは今後の課題です。将来タブレット端末が図書館の設備に組み入れられるかどうかは別として、書籍のプリント版と電子版は今後ますます、共存共栄の関係を発展させていくにちがいません^{10, 11)}。

5. 附属図書館からの情報発信

設立40年の内部改修にあたり、展示コーナー用のウィンドウスペースを二つ設けて頂きました。図書館前の廊下の展示ウィンドウとラウンジ内の展示ウィンドウです。ラウンジの展示ウィンドウでは、図書館が保管する寄贈された古書の貴重本や復刻版とそれにまつわる資料を展示するスペースとして、また廊下は「ヒポクラテスの本棚」というニックネームをつけ、特定のテーマに沿って図書館の資料を選び紹介しています。



写真1 ラウンジ展示「解體新書」

ラウンジ展示 (写真1)

2010年9月から第1回が「解體新書」のテーマで約1年間資料展示をおこないました。復刻版「解體新書」を中心に、資料として「蘭学事始」やヴェサリウスの解剖図などを併せて展示しました。2011年10月からは「緒方洪庵」のテーマで、洪庵が訳出した「扶氏經驗遺訓」のオリジナル本を中心に、「適塾」の資料を約1年間の期間で展示します。オリジナル本は地域の開業医の先生方より寄贈されたものです。

ヒポクラテスの本棚の展示 (写真2)

2010年7月から約1か月の期間をめぐり、展示を開始しました。これまでのテーマを表1でご紹介します。

表1 ヒポクラテスの本棚展示テーマ一覧

第1回 (2010. 7)	ヒポクラテス
第2回 (2010. 8)	Oxford
第3回 (2010. 9)	論文作成に役立てよう!
第4回 (2010. 10)	若いあなたへ生き方ヒント
第5回 (2010. 11)	図書館資料でみる川崎医科大学40年のあゆみ
第6回 (2010. 12)	『地球温暖化』の今!!!
第7回 (2011. 1)	ヴェサリウスと著書「ファブリカ」
第8回 (2011. 2)	図書館員おすすめの文庫・新書 第1弾
第9回 (2011. 3)	図書館に受入れされた辞典のいろいろ
第10回 (2011. 4)	Charles Darwin と種の起源
第11回 (2011. 5)	ビーグル号航海と適者生存
第12回 (2011. 6)	『裸のサル<The Naked Ape>』とデズモンド モリス
第13回 (2011. 7)	原発事故 Three Mile Island (TMI), Chernobyl そして Fukushima
第14回 (2011. 8)	長島愛生園と神谷美恵子
第15回 (2011. 9)	心臓刺激伝導系の発見: 田原 淳
第16回 (2011. 10-11)	若者のための人生相談
第17回 (2011. 12)	図書館員おすすめの文庫・新書 第2弾
第18回 (2012. 1)	骨と骨格 図書館資料からみるさまざまな視点

これら二つの展示コーナーの企画・運営のすべては、図書館スタッフによって行われています。実際の作業に携わる立場で、展示コーナーについて手短かにまとめてみたいと思います。

展示コーナー設置の第一の目的は図書館の利用促進を図る為という事を明確に理解していましたが、具体的テーマについては、頭の中でおぼろげにイメージはあっても手探りの感がありました。アイデアが豊富にあったわけではなく、いろいろの分野の先生方の御協力を得て継続的に運営していくことができました。テーマは広く話題性のあるもの、歴史的意義のあるもの、医学・科学史上での出来事などを選択して取り上げてきました。これまで続けてきて、企画・運用上での意義は次の様にまとめる事ができると思います。第一は、図書館スタッフが自館の蔵書に精通している必要があること。書架に並んでいる1冊1冊の図書の内容がわかっていて初めて「ヒポクラテスの本棚」に並べることができます。第二は、テーマについて伝えたい内容をしっかり掘っておく事。図書館は人に正確な情報を伝える責任を負っていることをスタッフが強く自覚したことです。また、利用者の皆さんから「こういう本を探していたんです」とか、「こんな本があったんですね」と貸出利用してもらえたことが図書館スタッフには大きな励みになりました。



写真2 ヒポクラテスの本棚 第1回展示

ラウンジの展示ケースは、「ヒポクラテスの本棚」とはまた別の意義を持っています。これまで当館が所蔵している貴重書を利用者に積極的に披露することはありませんでしたが、展示ケースの設置を機会に、関連書も合わせて現物を公開する事にしました。今後も医学史をテーマとする展示を予定しています。「ヒポクラテスの本棚」「ラウンジ展示」を附属図書館の特色のひとつとして、今後も継続して参ります。

6. 附属図書館の将来

振り返ってみますと、附属図書館がたどったこの40年の間、情報技術の進歩によって「図書館」そのものが大きく変貌しました。その主因は電子出版の出現です。「本と図書館の歴史」⁶⁾から、図書館の発達をふりかえってみましょう。図書館はおよそ5000年前のメソポタミアに始まるといわれています。楔形文字を粘土でつくった書字板の上に刻み、それを固めた板を分類し保管したのが世界最古の図書館だそうです。文字を記録する媒体はその後、石板、植物の皮(パピルス紙)、動物の皮(羊皮紙)、絹などがつかわれ、羊皮紙にかわって現在の紙が普及したのは印刷機が広まった1400年代からでした。長い歴史の中で文字情報が時代によっていろいろの媒体に記録されていった事を考えると、現在は文字が「紙」という乗り物から、「電子」へと乗り換えを始めたいわば“歴史の変わり目”の時期にあたるのではないのでしょうか。附属図書

館の40年はまさにその変わり目の中の40年でした。タイトルの“激動の40年”は、決して誇張ではない事を理解していただきたいと思います。そしてこの流れを見る限り、後戻りはありえないと確信します。では、附属図書館は未来へどのような展望を描けば良いのでしょうか？

「川崎学園だより」¹²⁾で紹介された様に、学園には医科大学附属図書館、医療福祉大学附属図書館、医療短期大学附属図書館があり、それぞれの施設の利用者を対象に、雑誌・書籍の購入・管理・保管を行っています。各図書館にはそれぞれに得意な分野があって、医科大学附属図書館は医学関係の資料は飛び抜けて多いけれど、一般教養書や雑誌では医療福祉大学や医療短期大学にかないません。また、当然ながら医療福祉分野の書籍・雑誌は医療福祉大学附属図書館がダントツですし、医療短期大学附属図書館では保育関連の絵本・書籍がとても充実しています。附属高校の図書室は、若者向けの雑誌・一般書を豊富に揃えています。附属川崎病院の図書室も今後、大学附属図書館の分室として充実することでしょう。学園内で分散するこれら図書施設の蔵書をまとめると、医学・医療に関する限り、その内容は質・量ともに総合大学の図書館に決して劣りません。医科大学(附属川崎病院を含む)・医療福祉大学・医療短期大学の図書館の蔵書は、現在OPACで一元的に検索する事ができるようになりました。もし、将来、蔵書が電子版にかわっていったら、すべての施設の蔵書へのアクセスもコンピュータでできる事になります。学園内のすべての図書館はたとえ建物はひろく分散していても、インターネット上でバーチャル「川崎学園図書館」として、それぞれの図書館が独自の特色・特徴を保全しながら、全体として一つの大きな共有情報源が形成されます。クリアしなければならぬ課題は少なくありませんが、電子化の向かう先には、それぞれの施設の特異性を保持しながら、利用者はバーチャルに統合された図書館からネットをつかってストレスフリーで、情報を得

る事のできる未来がみえてくるように思います。

7. 謝 辞

設立からの40年間, 5名の先生が附属図書館を担当してきました(表2)。

表2

氏名(敬称略)	教室名	担当期間
1 平野 寛	内科学教授	1970.9.1~1994.3.31
2 石井 鎌二	脳神経外科学教授	1994.4.1~2003.3.31
3 辻岡 克彦	生理学教授	2003.4.1~2008.7.21
4 石原 克彦	免疫学教授	2008.1.1~2009.3.31
5 佐々木 和信	解剖学教授	2009.4.1~2012.3.31

初代館長の平野先生は, ゼロから附属図書館を立ち上げ, 医学図書館としての今日の基礎をつくられました。先生が当時ご指導されたスタッフが, 現在リーダーとして附属図書館のみならず, 学園内図書館を運営し, 後進を指導しています。また先生が強いこだわりを持っておられた創刊からの Index Medicus は, 今後, 時の流れとともにその価値が高まっていく事と思います。石井先生が担当された時期は, 今ふりかえると外国雑誌の価格が高騰し始めた「シリアルズ・クライシス」の初期で, 毎年の外国雑誌購入カットへの対応にご苦心された事と思います。また, 図書館業務にコンピュータを導入し, 図書館のイメージが大きく変わった時でもありました。辻岡先生は洋雑誌のプリント版からオンライン版への移行期で, ワーキンググループを結成し雑誌の利用状況を計量化し, それにもとづいて雑誌削減を主張され, 厳しい時期を乗り越えられました。石原先生は辻岡先生の後, 業務のシステム更新に尽力され, 現在の体制をととのえてくださいました。4名の先生の築かれた成果の上に立ち, 附属図書館は40周年を迎え, 無事改装を終えて, 新しい出発ができました。この場を借りて, 御礼申し上げます。

なお, 原稿の執筆にあたり, 福永仁夫学長より賜った激励とご指導に, 心より感謝いたします。また, 本稿で掲載したデータのとりまとめとグラフ化の作業は, 現図書館スタッフである細川芳美, 杉本美佳, 高畑都, 河本諒子および木村かおり各司書の方々の惜しみないサポートによる事を末尾に記載し, 深謝いたします。

文 献

- 1) 川崎学園創立10周年誌 1980. pp414-426
- 2) 川崎学園だより 282号: 13-14. 2002
- 3) 川崎学園だより 294号: 16-17. 2003
- 4) 川崎学園だより 372号: 9. 2010
- 5) 阿部信一, 奥出麻里: 図解 PubMed の使い方 インターネットで医学文献を探す. 改訂第4版. 東京. 日本医学図書館協会. 2010
- 6) モーリン サワ文, ビル スレイヴィン 絵 宮本陽子, 小宮正子訳: 本と図書館の歴史-ラクダの移動図書館から電子書籍まで (The Story of Libraries from Camels to Computers): 東京. 西村書店. 2010
- 7) 中元 誠: シリアルズ・クライシスと学術情報流通の現在 (3). 情報管理53: 155-162, 2010
- 8) 植村八潮: 電子図書. 変わりゆく大学図書館 (逸村裕, 竹内比呂也編) 東京. 勁草書房. 2007. pp140-149
- 9) アメリカ映画 邦題「アンドロメダ」原題: The Andromeda Strain, 製作・監督: ロバート・ワイズ, 原作: マイケル・クライトン, 1971年8月公開
- 10) 紀田順一郎: 電子書籍の彼方へ. 本は, これから (池澤夏樹編) (岩波新書1280) 東京. 岩波書店. 2010. pp77-83
- 11) 日垣隆: つながる読書術 (講談社現代新書2133) 東京. 講談社. 2011
- 12) 川崎学園だより 381号: 11. 2011

注) 資料は9)を除き, 図書館で閲覧できます。

